

Citation: Sanchez-Manuel FJ, Lozano-García J, Seco-Gil JL. Antibiotic prophylaxis for hernia repair. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2007, Issue 3. Art. No.: CD003769. DOI: 10.1002/14651858.CD003769.pub3.
CRG名: Colorectal Cancer

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 28 June 2009
Clib issue No.; N/U: 2009 issue 4, Update

背景: ヘルニア修復のための予防的抗生物質投与は、この領域の研究結果の違いを考慮に入れると、依然として議論的となる課題である。

目的: 本システムティック・レビューは、開腹による待機的鼠径ヘルニア修復に伴う術後創感染率を減少させる上での予防的抗生物質投与の有効性を明らかにすることを目的とした。

検索戦略: 今回のレビューは、2009年6月に以下の検索語を用いて適格な試験を検索した。この検索により、新たに含めた1件の試験が明らかになった(計13件)。
フリーテキストおよびMeSH用語として、用語「herni*」および「inguinal」または「groin」と、用語「antimicro*」または「antibiot*」を交差させて、Cochrane Colorectal Cancer Group specialized registerを検索した。以下の用語を用いて、同様にMedlineおよびEmbaseを検索した:#1:「antibiotic*」または「antimicrob*」または「anti infecti*」または「antiinfecti*」、#2:「prophyla*」または「prevent*」、#3:#1と#2、#4:「clean」および(「surgery」または「tech*」または「proced*」)、#5:「herni*」、#6(「wound infection」)と#4、#7:#3と(#4または#5または#6)。その後追加された研究を同定するために、含めた研究の参考文献リストをチェックした。

選択基準: ランダム化臨床試験のみを含めた。

データ収集と分析: ランダム化臨床試験13件を同定した。このうちの7件はヘルニア修復(ヘルニア根治手術)に人工材料を使用していたが、残りの研究は使用していなかった(ヘルニア縫合術(herniorrhaphy))。人工材料の使用の有無に基づいて統合解析およびサブグループ解析を行った。ランダム効果モデルを本解析で用いた。

主な結果: 含まれた患者総数は6,825例であった(予防的投与群4,188例、コントロール群2,637例)。総感染率は予防的投与群およびコントロール群でそれぞれ2.8%および3.9%であった(OR0.64、95%CI0.48~0.85)。ヘルニア縫合術の患者からなるサブグループの感染率は、予防的投与群およびコントロール群でそれぞれ3.5%および4.9%であった(OR0.71、95%CI0.51~1.00)。ヘルニア根治手術の患者からなるサブグループの感染率は、予防的投与群およびコントロール群でそれぞれ1.4%および2.9%であった(OR0.49、95%CI0.29~0.86)。

レビューアの結論: 本メタアナリシスの結果に基づくと、待機的鼠径ヘルニア修復での予防的抗生物質投与を普遍的に推奨することはできない。また、高い創感染率が認められる場合も予防的投与を推奨することはできない。

(監訳 柴田 実)
翻訳公開日: 10年2月10日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点があれば、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。